

茨城高専国際交流センターの取組み

—国際交流クラブ10年目の課題—

茨城工業高等専門学校人文科学科教授

国際交流センター長 高橋 正人

Masahito Takahashi

【出だしのつぶやき】

茨城高専には「国際交流クラブ」というのがある。いわゆる部活動の一つなのだろうか。何をしているのか。どういう人がいるのか。ちょっとのぞいてみようかな。こんなふうに思って、一度来てくれるととてもうれしい。特に学生に来てほしい。そのためには、さて、どういう策を講じようか。

【国際交流クラブの胎動】

国際交流クラブの名付けの親は誰だったか。当時の副校長（教務主事）だったか、教務主事補（現副校長（教務主事））だったか。クラブ室も確保するから、立ち上げてくれないか、と持ちかけられたのが2001年度だったように記憶する。その頃すでに、2002年度から国際交流センターを設置し、筆者がセンター長であることを申し渡されていた。

【国際交流センターの設置】

茨城高専（以下本校という）では、2001年度までは、①留学生に関すること（「留学生委員会」）、②学生を海外の語学学校へ研修に出すこと（当時オーストラリアのみ、教務主事管轄）、そして③学術交流協定に関すること（締結と学生・教員の受入れ、教員の派遣は総務課総務係、学生の派遣は学生課教務係。フランスのルーアン応用科学大学との相互交流で「INSAルーアン部会」があった。）の3つがそれぞれに動いていた。それらを一つの組織にまとめて「国際交流センター」とした。

示された原案は大変重い組織だった。留学生専門部会（上記①と③の受入れ、留学生の受入れ実績はP7図表1参照）と海外研修専門部会（上記②と③の派遣）が有り、両者に専門部会長を置いた。センター長は当然ながら、両方に関わる。もっと動きやすい軽い組織にすべきだと強く主張したが入れられず、両部会長とそれぞれ二人三脚で一期2年間を務めた。

2年目の後半に校長に願い出て、次年度からの組織改編の了承を得た。誰が担当するにしても、少人数の方が動きやすいと考えた。副センター長3人、センター員若干名という極スリムな組織にした。センター長は以下の3部門と二人三脚である。①留学生担当副センター長、②海外語学研修担当副センター長、③学術交流協定担当副センター長。3つのうちのどこかが忙しいとき、センター長と副センター長の2名では人手不足だ。センター員に加勢してもらって事に当たる。これですっきりする。組織改編は実現し、次の方々に引き継いだ。

【国際交流センターの充実】

2004年度から3期6年間センター長を務めたのが三好章一教授、現高専機構の国際交流室長。この間に、海外語学研修の時期を年度末から夏休みに変更することにより、成績関係の不安がなくなり、参加者数制限を撤廃した。このときは50名以上が参加した。さらにイギリスの語学学校に派遣するプログラム、ニュージーランドの工科大学英語センターに派遣するプログラムが始まり、メキシコのアグアスカリエンテス工科大学と交流協定を結び、国際交流クラブにも本校の一般学生が徐々に入るようになり、留学生のチューターもボランティア制にするなど、様々な取組みがなされ、センターの活動内容が充実してきた。

【海外語学研修の拡張】

筆者が上級生対象にレベルを少し上げた語学研修先を見つけたいと思っていたところ、執行部も同じ思いであった。東京で英国の語学学校・大学附属語学センターフェアが開かれた。出かけてみておよその見当を付け、筆者が所属するヨーロッパ辞書学会国際大会がコペンハーゲン大学だったので、オックスフォードに寄って何方か見て回り、Oxford English Centreに決めた。

ニュージーランドは、当時の副センター長が自身を含め2名の教員でオーストラリア語学研修を引率したとき、北島ロトルア市のワイアリキ工科大学英語センターと交渉し、覚書という形で協定を結び、2週間の英語研修プログラムを始めた（P7、8 図表2、3、4参照）。



オーストラリア語学研修

（2年生：近所の高校とも交流）

【学術交流協定の増加】

メキシコからは調印式も含めて5年間で4回受入れた。学生は皆陽気で素直だった。Kimonoを着て、茶道を体験し、茶を味わって苦笑した。中にはKendoを体験したいと、稽古着・袴・防具一式を付け、重くてふらつきながらも竹刀を持って大声で張り切る



メキシコの元気な工科大学生

学生もいた。一方、本校からは・・・現地調査に教員が1名（本校物質工学科にはペルー出身の准教授(Ph. D)がいる）、専攻科生1名がアグアスカリエンテス市のメキシコ日産自動車にインターンシップに出かけた。スペイン語で苦労した。共通語は英語のはずではなかったか。結局「輸入超過」であった。人数だけ見ると18対2。大震災直前に協定リニューアルのオファーが来たが、その後、こちらからのメールには大学の専属オフィスも、担当者の

個別アドレスも、さっぱり反応がない。地球儀を見れば一目瞭然。本校は福島第1原発の隣と見える。反応がないのも当然だ。現在返事待ちの状態である。

浦島太郎よろしく、昨春、筆者が6年ぶりに、逃げ切れずセンター長になったが、その途端、前任者が最後の数カ月に蒔いておいた種が急速に育って（「高専教育改革推進経費」での本校プロジェクトの成果の一部）、韓国の朝鮮理工大学と学術交流協定をなんと5月に締結した（本校電気電子システム工学科には韓国出身の准教授（Ph. D）がいる）。そして早くも8月には本校の専攻科生6名の派遣が実現し、大学研究室や近隣の企業などで研修し、インターンシップ扱いとした。しかも今年は日本学生支援機構（JASSO）から留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）のSSSVプログラムとして認められ、朝鮮理工大学と本校、お互い10名ずつの学生が奨学金で行き来できそうだ。

フランスのルーアン応用科学大学（INSA de Rouen）との付き合いは長い。23年であろうか（P9図表5、6参照）。本校からは毎年専攻科1年生3名が選考され、2週間の研修に出かける。英語が共通言語。大学の外では通じないこともある。ボディ・ラングウェッジと親切なフランスの人々が助けてくれる。学生は研究の途中経過をまとめてプレゼンテーションをする、日本や茨城県、ひたちなか市、高専のことなども紹介する。INSAルーアンからは平均して2～3名が来る。本校学生との交流も計画するが、本校が窓口となり日本企業でのインターンシップが本命である。短期の学生も時たまいるが、大半が6カ月である。実現するかどうかは日本の景気次第。ここ数年は極めて厳しい。

他にも中国、タイ、ロシア、ポーランドの大学や研究所と交流協定を結ぶべく、提案を受けた教員やセンター運営委員が先方と協議・調整中である。追加募集でJASSOの支援が得られれば有り難い。

【外国人留学生の生活】

さて、留学生はどう暮らしているのか。基本的には寮生となる。留学生用に男女とも部屋を確保してあるし、自炊用の主食室も用意されている。通例、宗教上の理由が主である。昨年度から、ガスを電気（IH）に切り替えている。ガス警報器の誤作動緊急警報に悩まされなくて済む。筆者が寮を担当していた頃は当直者から呼び出されることが何度かあった。しかし今年から節電である。とは言え煮炊きは適用外だろう。学寮食堂を利用する留学生ももちろんいる。バイキング方式で美味しい。

留学生は忙しい。まずは市役所に登録。年齢により国民年金支払い猶予手続。銀行口座開設。寮生活のルールに慣れる。学習用語が不安。チューターに教わる。留学生指導教員（担任）にも教わる。国語や社会の科目を割愛し「日本語」を履修する。日本語教育専門の非常勤教員が3年生と4年生を担当する。5年生になると社会科学系の科目を取る者もいる。担当教員曰く、すばらしい答案を書く、日本人学生はもっと奮起してほしいと。留学生は優秀である。

国際交流クラブにも毎週顔を出す。市の国際交流協会主催の国際交流サロンにも出て母国の紹介をパワーポイントで格好良くしてのける（国際交流クラブでリハーサルをしてもらうが、その時点で完成度が極めて高い）。他の市の国際交流協会も呼んでくれ

る。本校国際交流センターが企画する日本文化理解研修旅行や、機構主催の地区別留学生交流会にも参加する。ライオンズクラブが納涼会に呼んでくれる。浴衣をいただいたりする。第2種兼業農家組合が田植え、稲刈り、収穫祭を体験させてくれる。茨城県の留学生親善大使になる。県の留学生交流会にも出る。



日本文化理解研修旅行（国際交流クラブ+センター教員+留学生指導教員「野口雨情記念館」）



田植え体験（留学生：ひたちなか市第二種兼業農家組合のお招きで）

市の国際交流ボランティア登録制度を活用させていただいて一人一人にホスト・ファミリーがつく。皆さん3年間付き合ってくれる。市内、県内、県外へ、見学に、遊びに連れて行ってくれる。週末ホームステイで日本の家庭料理を食べられる。もし我が家に来たら、食物はスーパーマーケット100%、開けて出す、切って出す。いろいろな家庭を見られる。

昨年オーストラリアの高卒男子がギャップ・イヤーで本校に来た。単位の取得が目的ではないので、本校では「交流学生」といい、学生証も発行するが、無償である。NPO法人の仲介だ。そこが全責任を持つ。ホームステイを原則とする。近所のご夫妻が引き受けてくれた。我が家にも2週間程いた。それこそ「ギャップ」に驚いたに違いない。数年前にもフィンランドから来ていた。本校の居心地がいいのか、二人ともものびのびしていた。



国際交流クラブ室にて（ギャップ・イヤーで来たオーストラリアからの交流学生の自己紹介）

【国際交流クラブの誕生から現在の課題まで】

いよいよ国際交流クラブである。10年前の二人三脚の相棒、留学生専門部会長は保健体育が専門。教育学部出身。小中学校での経験もある。流石である。留学生を一堂に集め、本音を聞き出した。彼らは不満であった。同国からの留学生と自分のチューター以外にほとんど友達がない。学科間の交流もない。日本人学生はめったに話しかけない。留学生の方から話しかけても長続きしない。そうなのだなあ。いまだに受

入れが上手ではないのだなあ。日本人だけで固まっていた方が心地いいのだなあ。日本の国際交流の意識と中身を変えるには時間がかかるぞ。

学生主事管轄のクラブとは違う。国際交流センターが持つクラブだ。学生会の予算が付かないが、協力してくれる先生方が数人いた。「教育・研究協力員」（無償ボランティア：本校の制度）も3名来てくれた。

クラブ室をもらって、水曜日の夕方顔見せて、名前を名乗って、おしゃべりしよう。飲み物とお茶菓子が必要だ。相棒と筆者とで毎週交替でいろいろなものを持ち込んだ。留学生同士といっても言語が違うから日本語で、チューターはもちろん日本語で、片言英語をしゃべる一般学生も来た。教員も含めて、時々いろいろな言語が飛び交う。日本語で何か聞くとぱっと切り替わる。学園祭（「茨香祭（しこうさい）」は隔年実施）にお店を出そう。何作る？マレーシア料理、インドネシア、モンゴル、ラオス、タイ、ベトナム、スリランカ？まずは関心のある街の人も巻き込んで、市のコミュニティーセンターの調理室を借りてリハーサルをしよう。口コミで人集めをした。大（中？）成功。市の国際交流係長が日曜日でも何のその、カメラ抱えてやってきて、この様子を市報に載せてくれた。

茨香祭にお店を出したら、すごい人気。半日で売り切れ。午後また買い出しに。2日目はもっとたくさん作った。でも売り切れ。行列のできる「アジアの台所」。市の産業交流フェアにも出てくれとのこと。定期試験も抱えているし、茨香祭のない年に参加しよう。無理は禁物。できる範囲で少しずつ。大切なことは、何か一つのことを計画段階から一緒にやると連帯感・仲間意識が生まれ、横にも縦にも、繋がりができてくること。少しずつクラブらしくなってきたかな？

留学生、チューター、一般学生のクラブ員、センター教員。教育・研究協力員。発足当時はなかなか一般学生が入ってこなかった。学生はクラブの名前から想像して英語でしゃべるのだと誤解していた節がある。留学生は専門科目の他に日本語・日本文化も学びたいのだ。国際交流クラブの広告を作って全教室に貼ってもらった。それでもなかなか一般学生は増えなかったが、縦横の交流はできてきた。一歩前進としよう。

副センター長3名の組織になってから、留学生担当の先生が自分のクラスの学生や他のクラブの学生などに声をかけてくれた。少し増えたようだ。研修旅行も皆で行こう。同行する先生方から少しずつ援助していただいて、学校予算からは出ない一般学生の分も出してしまった。そういう手もあったか。部屋ももっと広いところを取ってくれた。国別の紹介パネルも作って常時展示している。留学生が一時帰国すると母国の紹介リーフレットを持ち帰ってくれた。廊下にも国際交流クラブ・センターの活動を伝えるパネルをつり下げた。手作りのおもしろいものだ。

オーストラリアから交流学生が来ているときは何となく集まりがよかったようだ。やはり西洋系に弱いのかな。頭脳明晰な女子留学生在が「彼が来たからクラブ員が増えたのです。」と看破した。

今年度になって何となく国際交流クラブの元気がいまひとつというような感じがする。頭打ちなのか。何か策はないかと、久しぶりにみんなにメールを出してみたら、結構クラブに出てきた。コミュニケーション不足も一因だったか。おしゃべりの島と英語勉強会の島ができた。これも面白い。留学生と日本人学生が、どちらの島もうま

く混じっていた。

他に何かよい策はないか。市内在住の外国人にお願いしてボランティア講演会は？本校の書道部や茶道部との交流会は？一定時間区切って（たとえば15分間）使用言語を英語だけにしたら？マレーシアの学生の独壇場になるかな。毎年いるわけではないが帰国子女枠で入学してきた学生を取り込めないか。

年齢差はどうだろうか。留学生は19歳から22歳くらいの幅で編入学してくる。3学年に入るのでクラスでは少なくとも2才年上だ。1、2年生でクラブに入ってくる日本人学生がいる。さらに歳の差が広がる。でも学生同士だから、そんなに気にしていないのではないか。歳の差を取り払って留学生も日本人学生も大いに学びあえばよい。そのためには留学生の受入れを増やすことを考えなくてはならないだろう。

そろそろ紙数も尽きる頃だ。タイトル、副題、出だしのつぶやき、これらに答えられたらどうか。優、良は無理だ。どうか「可」としてもらいたい。日本人の島国的メンタリティーは10年前と比べて変わったのだろうか。

もしも、どのクラスにも留学生や交流学生が二人や三人いるという状況が出現したら、学生も教員も国際化を肌で感じ、意識も変わってくるだろう。国際交流クラブも押すな押すなの大盛況となるだろう。

駄文に目を通していただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

（*1この文を書くにあたり、筆者の知らない「6年間」のことなども含め、三好章一氏、奥山慶洋氏の両氏が、文部科学教育通信や国立高専機構留学生交流促進センター研究集会報告書に書かれたことなど、種々の資料使用の許可を得て、参照させていただきました。記して感謝申し上げます。）

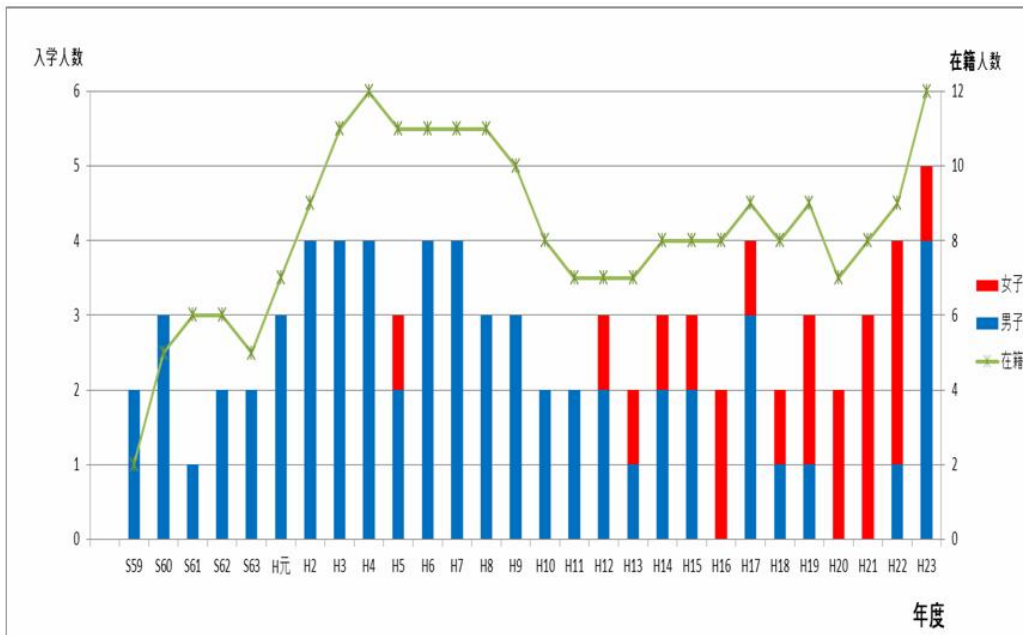
（*2この文を書き終えて見直した直後、メキシコからメールが入り、書道部から留学生との交流会計画が持ち込まれた。さて、この2つ、どうなるか。乞う、ご期待。）

【参考資料】

図表 1

留学生の受入れ実績(S59～H23)

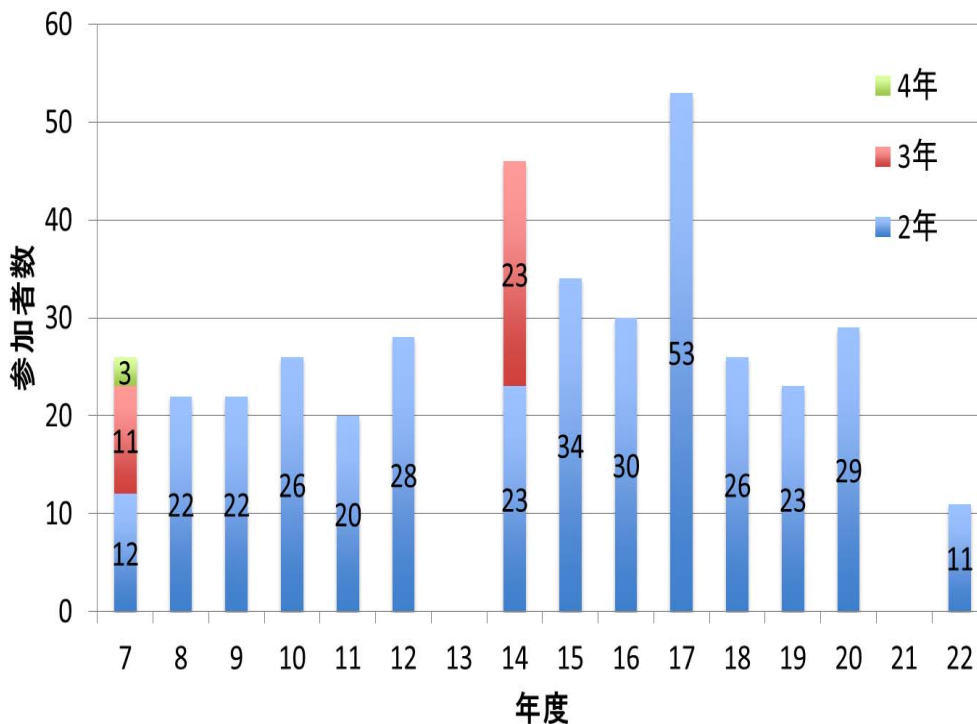
受入れ総数 81 名



図表 2

オーストラリア語学研修 (Universal English College)

参加総数 406 名

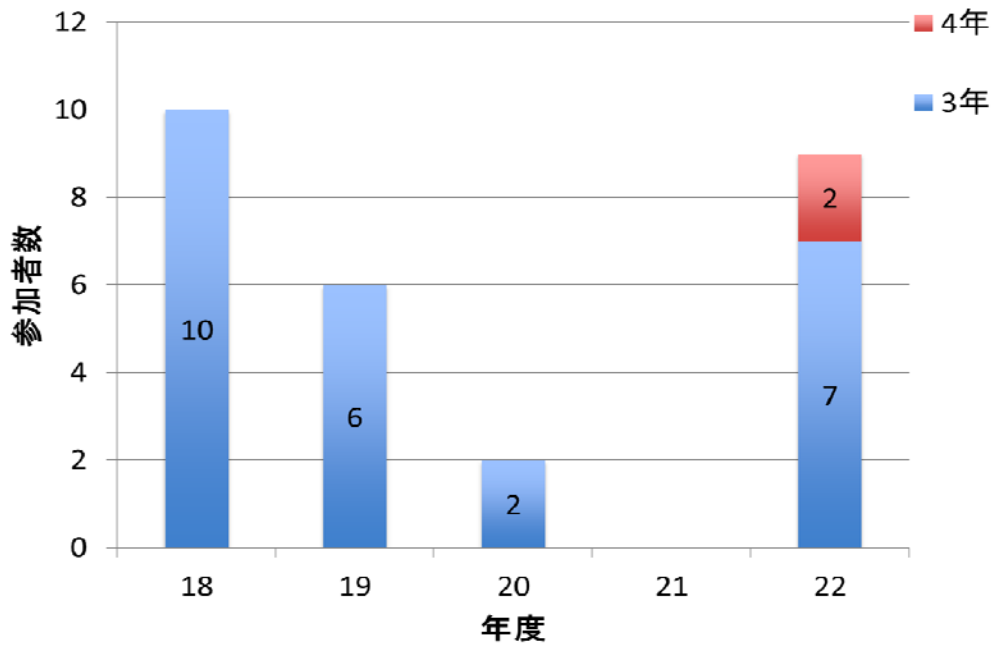


注) 13年度は同時多発テロにより中止し、翌年度2学年に渡り実施

21年度は新型インフルエンザにより中止し、翌年度2学年に渡り実施

図表 3

ニュージーランド語学研修(ワイアリキ工科大学) 参加総数 27名

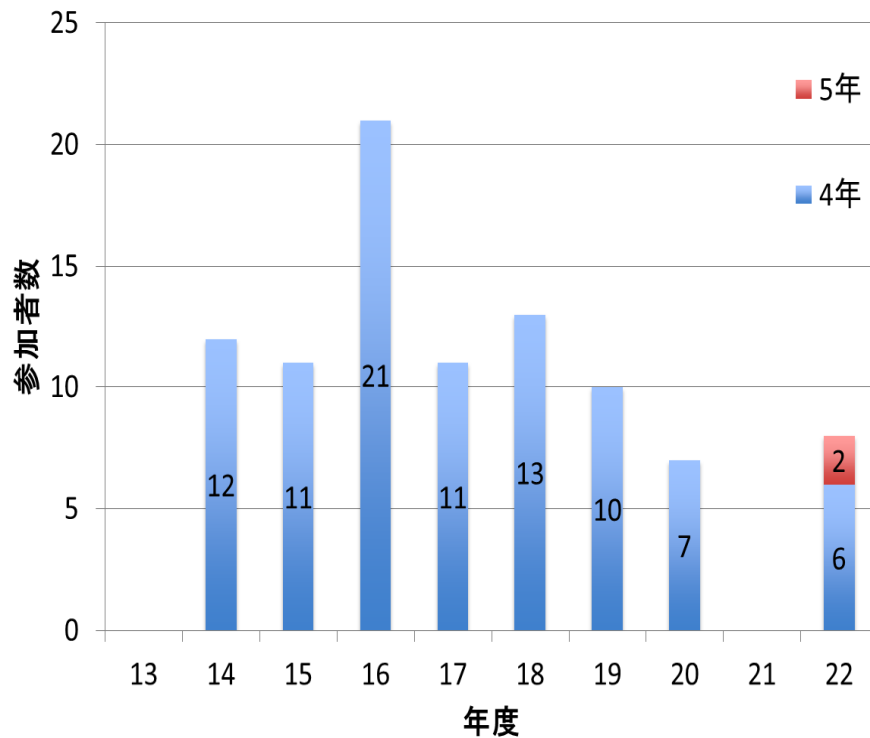


注) 21年度は新型インフルエンザにより中止し、翌年度2学年に渡り実施

図表 4

イギリス語学研修(Oxford English Centre)

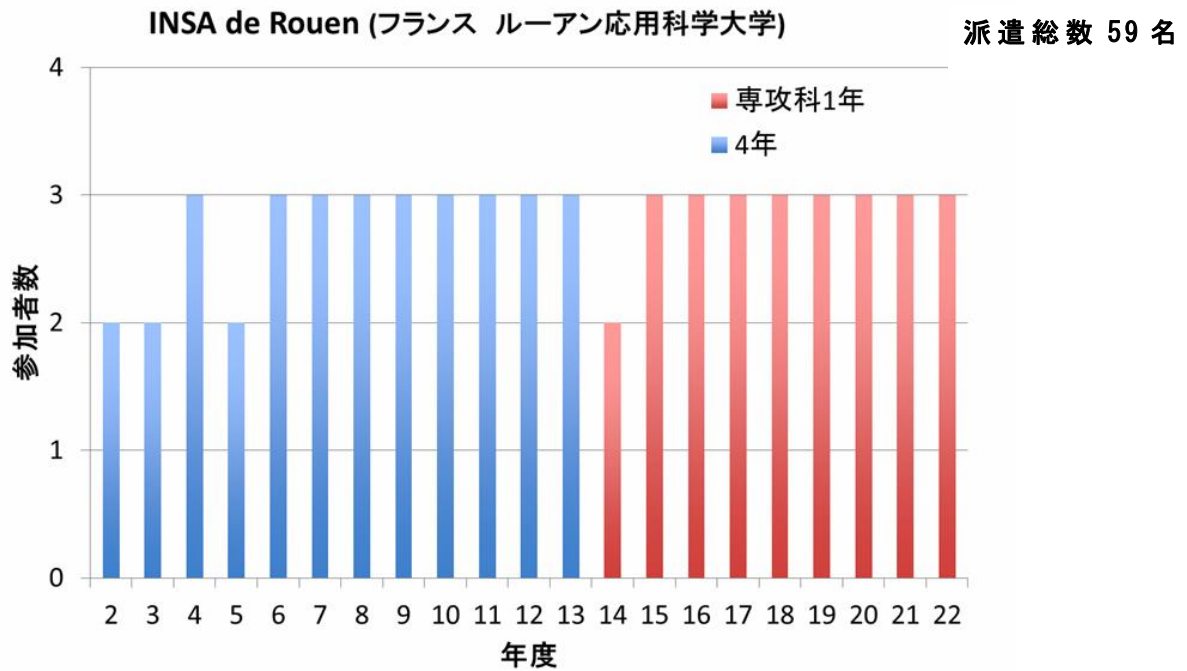
参加総数 93名



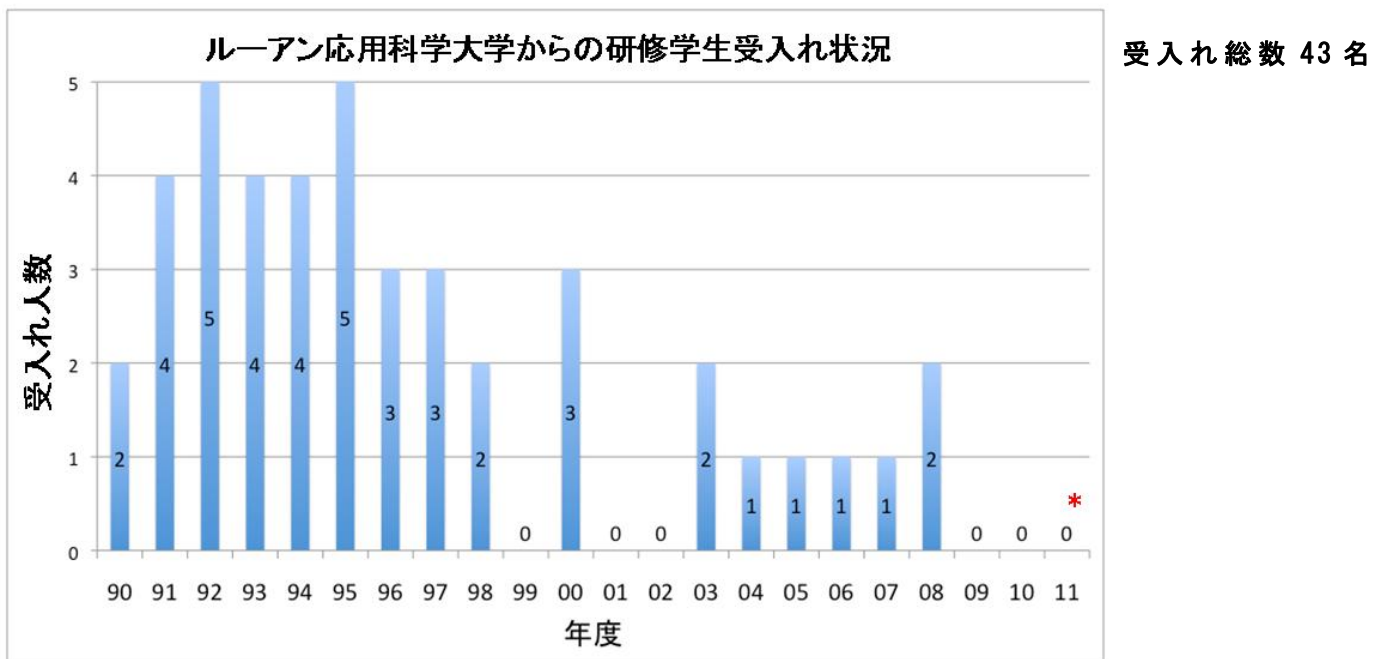
注) 13年度は同時多発テロにより中止し、翌年度2学年に渡り実施

21年度は新型インフルエンザにより中止し、翌年度2学年に渡り実施

図表 5



図表 6



*東日本大震災（3. 11）によって受入れが決まっていた学生1名が渡日を断念した。